

# 地域社会へ貢献する農業者集団に



農業 アグリフォーラム鶴岡 坂東 清一

山形県人が自分の故郷を自慢するとき、その中に緑豊かな自然や田園風景を挙げる人が少なくないと思う。また、緑一面の田園風景は、それを誇らないまでも好ましくない風景と思う人はいないと思う。しかし、この美しい緑、豊かな私たちの故郷が、ひとりでそこにあるのではない。その緑もよく見ると一様ではなく、田圃だと思った所が稲以外の別の作物の緑だったり、ただの雑草の緑だったりもする。

私たちの団体「アグリフォーラム鶴岡」は緑豊かな鶴岡と農業振興・社会貢献を目指す農業者のフォーラムとして四年前に発足した。農業者の組織・団体は数多くあるが、同じ集落や地域でも農業について話のできる仲間が少なくなっている。そこで、集落や地域や既存組織の枠を越え広く会員を募り、会員には何の制限も設けず、トータルに鶴岡の農業を考えようとしたのが第一の目的だった。第二の目的は、これまであまり力を入れてこなかった農業者の立場から社会に対して意見

を述べ情報を提供して農業を通して社会に何らかの貢献をし、そのために自己研鑽(さん)することだった。これまで農業者の立場からいろいろ意見を言いたくても、その機会すら与えてもらえない事も多かった。私たちは鶴岡の農業者を代表しているなどと思い上がったはいないが、もし、農業者の立場からの意見を求められる機会が与えられるならば、進んでその受け皿の一つになり得るようになりたいし、出来ることは限られているかもしれないが協力は惜しまないつもりである。私たちの趣旨を理解していただき鶴岡市農政課に事務局を置いているが、会の活動や運営はあくまでも自主的に行っている。市役所に事務局をお願いしているのは、残念ながら私たち農家個人よりも市役所農政課の方がいろいろな方面から情報が集まりやすい事と、各方面に情報提供を求める場合にも相手の協力を得やすいためである。

私たちの会の会員は、それぞれが自分なりの農業経営をしている事は当然として、農業

団体の役員や公的な職を持つ者、地域の指導的立場にある者など、それぞれに多忙を極める会員がほとんどで、必ずしも頻繁に事業に携わっている訳ではない。しかし、既存の農業者組織ではできない事を、または、それ以上の事を行うことを目指し、それを活動の根幹に据えている。また、私たちは何か事業を企画する場合、会主催にこだわらず、出来るだけ共同開催を呼びかけたり、幅広い層の参加を呼びかけていくことにしている。

これまで行ってきた活動の一部を紹介すれば、学習活動としては山形大学農学部の方との連携がある。現在、四人の先生方に特別会員の資格で会員の一人として活動に参画していただいている。山大的先生方に学ぶ車座学と「ミニゼミ」は昨年、流通・情報・環境、グリーンツーリズム、地域官農の四つのミニゼミを開催し、会員以外にも女性のグループや市役所の職員なども個人の立場でメンバーとして参加してもらった。最終講座の後にまとめた「中間報告書」は、市など各方



面に政策提言の一つとして提出している。このミニゼミは今年度も山大の四人の特別会員の協力で開催している。こうした山大の先生方のお付き合いかから、大学に特別講義でお出でになった学外の先生方の話を聞く機会を得たり、また逆にこちらから大学で話す機会があったり、学生と一緒に先生に農業の現場にお出で頂いたこともある。他に、MG研修や農業ハイテク研修、異業種間交流、経営に生かすための視察研修、一般の方々をも視野に入れた農業推進講座開催など多くの活動を行っている。もう一つの活動の柱である社会貢献事業は、将来を担う子供たちの農業理解の一助のために鶴岡市内の六つの中学校に学

期ごと年三回、会員が栽培している花を贈る事業を行っており喜ばれている。

一般市民を対象にしたものとしては、だだちや豆とビールと好楽の落語の会」とか文化講演会（講師・幸田シャーマン氏、森田正光氏）の開催がある。今年は十一月六日に劇映画「原野の子ら」の県内初の上映会を行った。その映画のシーン、村の古老の一言「人間食わんでは生きられんとだけん、これほど見通しのたつ仕事はなか。生き物ば育てる仕事は、焦つたらいかん」は心に響いた。人間いくら時代が進んでも電気や原子力で動くわけではないし、コンピュータや機械を食って生きるわけでもない。金さえあれば世界中から米でも何でも集めることができるし、それに日本は貿易黒字国であり金もある。しかし、平成五年の大凶作の時の外国産米に対する国民の強い拒否反応があった。また、進んだバイオ技術をもってすれば、食糧危機など質・量・味ともに問題なく解決できるという人も多い。しかし、遺伝子組み替え食品に対する拒絶反応も今年表面化した。ただ、私は食糧危機は間近に迫っていると思うが、その時は農業や農民が日の目を見るいい時代になる、なんて甘い考えは持っていない。確かに農業にとつて今は厳しい時代であるが、農業にのだから、今更ジタバタすることはない。

かつては多くの先達がムシロ旗を立てた時代もあったし、つい近年には娘を身売りさえしている。それに比べたら今の厳しさなど取るに足らない。これまでも、また今後もこの日本で農業をどう位置付けるのかは農民だけの問題ではなく国民的な問題であると思つ

日本に農業はいらぬ、外国に頼るといふのであれば、それもよし。しかし、農業が、そしてそれに従事する農民が必要と言つのであれば、それなりの努力と責任と負担を負わねばならない。農業には学歴や年功も通用しない。やる気は必要だがやる気だけで何とかなるほど甘くはないし、実力を問われる世界である。また希望的な意味ではなく真正銘の未来型総合産業でもある。お互いに知らない事からくる誤解も多い。その誤解の解消に対する農業者側からの努力はこれまで少なかった。私たちの活動がわずかでも相互理解のために力になればよいと思う。

あちこちの田圃に咲き乱れたヒマワリやコスモスの花はきれいだが、景観作物という転作対象の何も生まない愚策のアダ花である。花がきれいなだけにむなしく悲しい。私たちみんなを取り巻く緑が元気な美しい緑であるために私たちは努力している。

## 坂東 清一

アグリフォーラム鶴岡会長  
1951年2月25日生まれ  
鶴岡市大字勝福寺字下川田235

鶴岡市朝市の会前会長・現監事。あやしい百姓中年隊代表。中国倶楽部主宰。鶴岡の旬を楽しむ会実行委員。保護司。

米（JA出荷と直販）を中心に、農業を営む（他に野菜・庄内柿）。3年前より、水稻直播栽培生育調査圃担当。